

# ホージャ・アフラールとアブー・サイード ——ティムール朝における聖者と支配者——

川 本 正 知

## はじめに

14世紀後半から16世紀初頭にかけて、中央アジア及びイランの地を支配したティムール朝における聖者と支配者との関係の重要性を最初に指摘したのはソ連のバルトリドであった。彼は *Mā warā' al-Nahr* の支配に関して「40年間の *Ulugh Beg* の統治は、*Abū Sa'īd* によって *Tashkand* から招かれた *Naqshbandī* 教団の一員 *Khawāja Aḥrār* の40年間の統治によって引きつがれたのである (*Ulugh-beg*, p. 168<sup>1)</sup>。」と述べ、*Naqshbandī* 教団の *shaykh*, *Khawāja Aḥrār* のティムール朝支配者に対する影響力の大きさを強調した。バルトリド以降、ソ連において研究が続けられ、*O. Д. Чехович* は、1974年に *Khawāja Aḥrār* に関する文書類を校訂出版し、彼が膨大な土地、財産の所有者であったことを確認するにおよんでいる<sup>2)</sup>。

これに対して、ティムール朝下のイラン社会における聖者達の諸活動に関して、*J. Aubin* は、みずから校訂出版した聖者伝 (*Aubin, J.*, “Fragments historiques concer-

1) バルトリドの研究は *Minorsky* によるすぐれた英訳を利用する。略称は以下のごとし。

*Ulugh-beg*: *V.V. Barthold, Ulugh-beg, Four Studies on the History of Central Asia*, II, tr. V. & T. Minorsky, Leiden, 1958.

*Mir 'Alī-Shīr*: *do, Mir 'Alī-Shīr, Four Studies*, III, Leiden, 1962.

2) *O. Д. Чехович, Самаркандские Документы XV-XVI вв. (О владениях Ходжи Аҳрара в Средней Азии и Афганистане)*, Москва, 1974. この研究に関しては、間野英二「ナクシュバンディー教団に関する最近の諸研究について」『イスラム世界』21, 1983, pp. 45~51, *J.M. Rogers*, “*Wa-qfiyyas and Waqf-Registers*”, *Kunst des Orient*, v.11, 1976—77, pp. 182~96に詳しい解説と批判がある。

nant Bam sous les Timourides et les Qara Qoyunlu”, *Farhang-e Irân-Zamin*, II -2&3, Téhéran, 1333/1954, pp. 93-232) によって「バムの2人のサイド」(*Deux sayyids de Bam au XV<sup>e</sup> siècle : Contribution à l'histoire de l'Iran timouride*, Wiesbaden, 1956) を書いた。この研究は、Kirman 地方のイラン人社会においてバムの町のシーア派の聖者が果たした役割をあらゆる角度から分析したものであり、今後の聖者伝研究の指針となるものである。聖者達とティムール朝支配者達との交渉についてはIV章 (pp. 101-114) がさかれている<sup>3)</sup>。

また、ごく最近の研究としては、今までの研究を総合した形で、T. Allen 「ティムール朝のヘラート」(*Timurid Herat*, Wiesbaden, 1983) の3章 (pp. 36-45) が聖職者達と支配者達との一般的な関係について包括的に述べている。Allen の提言はまだ仮説の段階に過ぎないが<sup>4)</sup>、ティムール朝においては、彼が述べるように、君主達及びその軍

- 
- 3) この書の他、同じティムール朝治下の聖者に関するものとして J. Aubin, “Un santou quhis-tant de l'époque timouride”, *REI*, 35, 1967, pp. 185-216がある。
- 4) Allen は、ティムール朝の支配者達をティムール朝君主を含めたトルコ系 amīr 達の集団とスーフィー聖者を含む聖職者集団との2つにわけ、この2つの集団が基本的には農業を経済基盤とするティムール朝下の耕作地からの収入を前集団が後集団に寄進するワクフという形態でもって分配していたとする。そして、その分配の具体的な機関が、理想的には永続的にワクフの収入によって維持されるマドラサ、マスジドその他の宗教的建築物なのだという。彼は、第3代君主 Shahrukh (在位1409-47) が首都として以降、一貫してティムール朝の首都として機能した Harāt に建てられた宗教的建築群の膨大な数、その建築及び維持に費される巨大な富に注目したのである。魅力的な提言ではあるが、現在の段階では完全に受入れることはできない。なぜならば、Harāt, Bukhara, Samarqand などの大都市の商工業活動をあまりに軽視しているという批判はしばらくおくにしても、上述の Чехович の説に対する Rogers の批判をそのまま受け入れ、その上に立って立論しているからである。すなわち、Чехович によれば Khwāja Ahrār の所有地は寄付あるいは購入というかたちで入手され、その内の大部分は小地主、職人、小商人達からの購入であったとするが (Чехович, там же, стр. 25), Rogers は売却した人々は ‘ulama’ 達すなわちイスラーム聖職者達であったとしているのである。それは、彼が売却した人々の名の後につく職業名をそのまま当人達の職業とは考えず、むしろ名前の前にくる mawlānā なる称号に注目したからである (Rogers, *op. cit.*, p. 191)。Rogers の説を受け入れたならば、土地の売買は聖職者及びスーフィー教団の shaykh の間のみおこなわれていたことになり、実質的に土地を所有していた者は、王族を含む amīr 層及びスーフィー教団の shaykh を含む聖職者層となる。現在のところこの Rogers の Чехович 批判はまだ確認されたとはいえない。とすれば、Allen の説もやはり少しあやしいと言わざるをえない。そもそも、こういう疑問が生れるのも、Allen が Harāt の建築物に関する具体的な文書を一切使用していないからである。

隊を支える amīr 層から聖職者層へのワクフの寄進が大規模におこなわれていたことは確かであり、それは後の Uzbek 時代にまで続く現象であった<sup>5)</sup>。しかし、なぜこのような寄進がおこなわれたのであろうか。単にトルコ・モンゴルの遊牧国家のイスラーム国家への変質という一言でかたづけしてしまうわけにはいかない。この疑問に答えるためには、Aubin が前掲書Ⅳ章でこころみたとように、より具体的に支配者と聖者を含む聖職者との接触の場面を再現してみなければならない。

また、15世紀は Naqshbandī 教団などのスーフィー諸教団が、イスラーム圏各地に急速に拡っていった時代であり、その過程において聖者崇拜が重要な要素をしめていたと言われる<sup>6)</sup>。なぜ、この時代に、民衆の間に聖者崇拜がさかんになっていったのであろうか。その社会的要因はいまだ十分に明らかにされてはいない。

本稿では、今日まで利用されることのなかった Khwāja Aḥrār についての聖者伝の紹介をおこない、この史料を使ってもう1度バルトリドの扱った Khwāja Aḥrār とティムール朝君主 Abū Saʿīd の関係を考察し、上記の疑問に私なりの解答を与えてみようと思う。

## I *Majālis-i ʿUbayd Allāh Aḥrār*

今日までに Khwāja Aḥrār の伝記として知られているものは、古くから知られている (1) Fakhr al-Dīn ʿAlī b. Ḥusayn Wāʿiẓ Kāshifī, *Rashahāt-i ʿAyn al-Ḥayāt*<sup>7)</sup> の他に、Чехович 他のソ連の研究者が使用している写本 (2) Mīr ʿAbd al-Awwāl, *Masmūʿāt*, (3) Muḥammad Qāḍī, *Silsilat al-ʿĀrifīn wa Tadhkirat al-Ṣiddīqīn*, (4) 無名氏, *Manāqib-i Khwāja Aḥrār* がある<sup>8)</sup>。また、H. Algar によってこれらに加えて3つの写本 (5) Mīr ʿAbd al-Awwāl, *Majālis-i ʿUbayd Allāh Aḥrār*, (6) 無名氏, *Maqāmat-i ʿUbayd Allāh*

5) R.D. McChesney, "The Amirs of Muslim Central Asia in the XVII<sup>th</sup> century," *JESHO*, 26—1, 1983, pp. 66—70. また、バムのサイード達も多くの土地を所有していたことが Aubin によって明らかにされている (J.Aubin, *Deux Sayyid.*, pp. 92—95)。

6) J.S. Trimingham, *The Sufi Orders in Islam*, London, 1971, pp. 102—104.

7) 最も新しい版 Mawlānā Fakhr al-Dīn ʿAlī b. Ḥusayn Wāʿiẓ Kāshifī, *Rashahāt ʿAyn al-Ḥayāt*, ed. ʿAlī Aṣghar Muʿīniyyān, I, II, Tehran, 2536/1977 を利用する。この書については H. Beveridge, "The Rashahat-i-ʿAinal-Hayat, Trickleings from the Fountain of Life," *JRAS*, 1916, pp. 59—75 参照。

*Aḥrār*, (7)Abū ‘Abd Allāh Samarqandī, *Mukhtaṣar al-Wilāya*が発見された<sup>9)</sup>。本稿で紹介するのは、インディア・オフィス・ライブラリー所蔵の(5)の写本 (ms. India Office Library, D. P. 890a, foll.1~201a) である<sup>10)</sup>。

著者名は1a及び200b葉に、書名は200b葉にのみ書かれている。コピストは Qūṭb al-Dīn Aḥmad al-Harawī b. ‘Alī Shāh なる人物であり、この書を Tirmid の地において、933年 Dhū al-Qa‘da 月 (1527年7月30日~8月28日) に書写し終えた (*Majālis*, 200b~201a)。このコピストがいかなる人物かは、Harāt 出身者であることを示す Harawī なるニスバをもつこと、その父 ‘Alī Shāh が ḥajjī であり、メディナに葬られていること以外にはわからない。

著作年は書かれていないが、著者の Mīr ‘Abd al-Awwal なる人物については *Rashaḥāt* に詳しく述べられている。それによれば、彼の祖父は Amīr ‘Izz al-Dīn Ṭāhir Nīshābūrī なる人物であり、学問 (‘ulūm) に精通し、それを教えていた (*Rashaḥāt*, II, p. 607)。Mīr ‘Abd al-Awwal は、この祖父のもとで学問をおさめた後、Nīshābūr から Samarqand の Khwāja Aḥrār のもとに弟子入りし、7年間修業にはげんだ後、Khwāja Aḥrār の娘と結婚し、3男2女をもうけた (*Rashaḥāt*, II, pp. 603~4)。彼は Khwāja の最も信頼する弟子の1人であった。彼の死は、905年 Dhū al-Ḥijja 月初旬 (1500年6月

8) (2)~(4)の写本の所在については、Чехович, там же, стр. 14-17, Rogers, J. M., “AḤRĀR, Kāja ‘Obaydallah b. Maḥmūd(806-96/1404-90)”, *Encyclopaedia Iranica*, I—6, (以下 Rogers, EIr と略する) p. 669参照。また(4)の写本に関しては Б. Казаков, Анонимное житие Ходжи Ахрара, Источниковедение и текстология (средневекового Ближнего и Среднего Востока), Москва, 1984, стр. 103-108 が詳しい紹介をおこなっている。Казаков は Институт Востоковедения АН УзССР 所蔵の(4)の3種の写本を詳細に研究し、(4)の書が1509年から1515年の間に書かれた伝記であることを実証した (Б. Казаков, там же, стр. 104)。また、彼は(4)の中からいくつかの重要な部分を訳出しており、本稿では注にその部分を使用することにした。

9) (6)(7)の写本の所在については、H. Algar, “Bibliographical Notes on the Naqshbandi Tariqat,” *Essays on Islamic Philosophy and Science*, ed. G. F. Hourani, Albany, N.Y., 1975, p. 256参照。

10) この写本は、インディア・オフィス・ライブラリーの出したペルシア語写本カタログには載せられておらず、もちろん Storey, Брегель の文献志にも著者名、書名ともあげられていない。また、Algar は写本の所在を指摘したのみで、具体的な紹介や、これを利用した研究はまだ発表していない。

28日～7月7日)であった(*Rashaḥāt*, II, p.608)。Khwāja Aḥrār が Samarqand にやってきたのは1451年であるので, Mīr ‘Abd al-Awwal が Samarqand にきたのはそれ以降ということになる。従って, 1451年以前についての記述は彼自身の体験にもとづくものではないと考えてよい。

さて, 著者 Mīr ‘Abd al-Awwal には上述の(2)*Masmū‘āt* なる著作もある。この著は Muḥammad Qaḍī の(3)の著作と共に *Rashaḥāt* の重要な典拠となっている。現在, (2)(3) 両書とも見ることができないのであるが, *Rashaḥāt* には, 「Mīr ‘Abd al-Awwal 御前——神が彼に恵みを垂れますように——は御自身の *Masmū‘āt* の中に以下のように書かれている。」とことわり書をして引用している部分が4ヵ所あるが, その部分は全て *Majālis* の中に対応する部分が見出される (*Rashaḥāt*, II, pp.374～5——*Majālis*, 122a～b, II, pp.411～12——193a～194b, II, pp.426～7——110b～111a, II, pp.602～3——128a～b)。また, なんのことわり書きもないが, 同じ文章を写したことが明らかである部分は非常に多い(例えば, *Majālis*, 50a——*Rashaḥāt*, II, p.401, 51a～b——II, pp.428～9, 94b——I, p.196, 168a～b——II, pp.413～14)。こうしてみると, 少なくとも *Rashaḥāt* が典拠としている *Masmū‘āt* の内容は, *Majālis* と共通した部分を多く含むものであることは間違いないであろうし, 同一のものである可能性もある<sup>11)</sup>。

次に, *Majālis* の内容であるが, ほとんどが Khwāja Aḥrār の言葉をそのまま記録し, 章分けもおこなわずに編集したものである。それらの言葉の大部分は, 預言者 Muḥammad 及びその教友達, Ibn ‘Arabī, Bāyazīd Bisṭāmī, Ghazālī, 歴代の Naqshbandī 教団の shaykh 達などの教説の Khwāja 自身による解説であるが, 後半部分になると Khwāja がそれらの言葉を語った時の状況について, Mīr ‘Abd al-Awwal 自身による説明が多くなってくる。その中には年代が記されている場合もあり, 貴重な史料となる。

11) *Rashaḥāt* は, *Majālis* なる著書には全く言及していない。また, *Kashif* は自己の典拠を説明した部分で, 「第2節 (maqṣad) では御言葉の引用をおこなう。その内のいくつかは Amīr ‘Abd al-Awwal 御前と Muḥammad Qaḍī 御前——至高の神が御2人に恵みを垂れますように——が御自身達の聴聞集 (*masmū‘āt*) にのせておられるたぐいである (*Rashaḥāt*, I, p.361)。」と述べており, *Kashif* は Muḥammad Qaḍī の(3)の書名を知っていたのであるから (*Rashaḥāt*, II, p.626), この場合 *masmū‘āt* は明らかに書名ではなく聴聞集という一般名詞である。後に述べるように *Majālis* の内容は, まさに聴聞集 *masmū‘āt* と呼ばれるにふさわしいものである。

例えば「880年（1475年5月7日～1476年4月26日）、農民達（ra'aya）や貧しき者達（fuqara'）に、dah-yazdah 税の課税（taḥmīl）があった。Īshan 御前（Khwāja Aḥrār）は、法になつた王権（salṭanat-i shi'ārī）について、また税の免除の請願（iltimas-i bakhshish）を手紙に次のように書かれた（*Majālis*, 138b）。」と前置きして、その手紙の内容を述べている。当時の Samarqand のティムール朝支配者 Sulṭān Aḥmad Mīrza（在位1469～94年）への手紙であろう<sup>12)</sup>。

また、Mīr 'Abd al-Awwāl の心を打つた Khwāja の弟子達への慈愛にみちた行動（例えば193b～194b）についての著者自身の記述もでてくる。そして最後は、895年 Rabī' al-Awwāl 月（1490年2月）の Khwāja の臨終の様子が述べられている（194b～195b）。

すでに述べたように、この *Majālis* と *Rashaḥāt* には多くの共通部分がある。その部分を見くらべてみると、*Rashaḥāt* は、ほとんど無作為に並べられた *Majālis* の中の話を、主題に従って細かく分けた項目の中に整理して配列していることがわかる<sup>13)</sup>。また、*Majālis* は Khwāja の言葉を記録することを目的として書かれた著作であると思われ、*Rashaḥāt* にときにあらわれる Khwāja の超自然的な力、すなわち奇蹟の話は一切あらわれない。ほとんどのエピソードは、あたかもハディースのように Khwāja の言葉を記録した時点で終わっており、*Rashaḥāt* にくらべて話としては断片的であるが、より信憑性の高い記録であると思われるのである。

## II Khwāja Aḥrār と支配者達

Khwāja Aḥrār が実際にティムール朝の君主と関係をもつようになったのは、1451年に Samarqand にて即位した Sulṭān Abū Sa'īd Mīrza の時代からである。彼は支配者達をどのように考えていたのであろうか。

彼は君主達について、次のように言っている。

次のようにおっしゃられた。「王者達（padshahan）は、神（Haqq）——讃えあれ——の支配（ḥukm）と権力（iqtidar）の顕現（muzahir）である。そして完全なるその顕現であるためには、支配と権力において独立（mustaqill）でなければならない。

12) dah-yazdah 税については後述する。

13) 単語の異同は多く、中には意味が全く違ってしまうものもある。例えば、*Rashaḥāt*, II, pp. 426～27 は *Majālis*, 110b～111a に対応するが、*Majālis* では夢の中での出来ごととして描かれている話が、*Rashaḥāt* では現実の事件として書かれている。

王権 (salṭanat) にかかわることにおいては共同 (sharakat) ということは欠点であり、恥である (Majālis, 118b)。」

すなわち彼は、王者達を神の力の地上での顕現とみなす。また、彼は独裁的な権力を望んでいたのである。

また、次のように述べている。

支配者達 (ḥukkām) とは鞭 (tāziyāna) のようなものである。彼らは、農民達 (ra'āyā) やムスリム (muslimīn) の調教 (ta'adīb) のための馬用の鞭 (chābuk) だ。1匹の馬は20本もの鞭 (tāziyāna) を古びさせ、使いものにならなくするものだ。しかし、彼らは、日暮 (rūz-i jawāl) のことを考え、農民達 (ra'āyā) の状態に注意していなければならない。なぜならば、王権と支配権 (ḥukūmat) が繁栄へ到達する真の手段は農民達と貧しき者達 (fuqarā) なのであるから (Majālis, 124a)。

ここで彼は、農民、ムスリム、貧しき者達を馬にたとえており、支配者達を馬に乗る人又はその鞭にたとえる。そして、鞭打つことは必要であるが、馬をつぶしてしまったのでは繁栄への道をたどることはできない。支配者達は必要なものであるが、彼らは常に人民への配慮をおこたってはならないと考えているのである。

さて、自然と超自然との間に絶対的区別はおろか、明瞭に指摘できる区分さえもたなかった前近代文明の中世イスラーム社会の人々にとって、夢は現実に生起する事象とより高次な超越的、絶対的な存在世界との交流の手段と考えられていた。それゆえ、ここでは夢解釈 (ta'bīr) は重要な意味をもったのである<sup>14)</sup>。

ある日、Mīrzā Sulṭān Abū Sa'īd の夢の内容が Khwāja Aḥrār に伝えられた。それは、

14) *Le rêve et les sociétés humaine*, sous la direction de Roger Caillois et G.E. von Grunebaum, Paris, 1967所収の Grunebaum による序論 (三好郁朗他訳『夢と人間社会(上)』法政大学出版社, 1978年, pp.1~29) 参照。ティムール朝時代に夢が政治的にも大きな意味をもったことは, Zāhīr al-Dīn Muḥammad Babur, *Bābur-nāma* (*The Babar-nāma (Fac-simile)*), ed. A.S. Beveridge, London, 1905; reprint, 1971), 83b, 118 b に実例がある。なお, *Bābur-nāma* には Beveridge による訳注 *The Babur-nāma in English (Memoirs of Babur)*, tr. A.S. Beveridge, London, 1922; reprint, 1969, 日本語訳, 間野英二「『バーブル・ナーマ』の研究(Ⅰ)」「フェルガーナ章」日本語訳『京都大学文学部研究紀要』22, 1983, 同「『バーブル・ナーマ』の研究(Ⅱ)」「カーブルの章」日本語訳『同』23, 1984があり, 以下それぞれ, *Bābur*, Beveridge 訳, 間野訳(Ⅰ)(Ⅱ)の略称で使用。上記の該当部分はそれぞれ Beveridge 訳, p.132, 間野訳(Ⅰ), p.300, p.343にあたる。

肩帯 (ḥamā'il) をつけた美しい女がおり、肩帯には魔除と護符がついていた。Abū Sa'īd が彼女を抱きよせた時、魔除と護符が彼の胸に痛みを与えた。この夢の解釈として Khwaja は次のように語った。

美しい女は王権と帝王権 (mulk wa padshahī) である。魔除 (ta'wīdh) と護符 (tamīm) は正義 ('adl) である。なぜなら、王権にとって正義がそうであるように、魔除と護符はその持主の安全を守るための道具である。「王権は背信 (al-kufr) と共に存続することはあるが、圧政 (al-zūlm) と共に存続することはない (原文アラビア語)。」と言われる。Mīrza は王権と帝王権を完全なる愛でもってわがものとしたが、しかし魔除と護符である正義の規範と法 (qawā'id wa qawānīn-i 'adl) は彼に痛みを与えた。思うに、健康のための道具である魔除や護符と同じく、正義とは王権と帝王権の美しさを増加させ保つための道具であり、その持主のお守り (ḥarz) なのである (Majālis, 179a~b)。

王権には、王権を有するものに痛みを与える正義が必要なのである。そして、正義を有し、圧政をさけることによって王権は存続するのである。ここに、Khwaja が君主 Abū Sa'īd に求めたことがはっきりとあらわれている。強力なる王権の存続と圧政に対する正義による統治である。また、Khwaja は、単に求めただけでなく、かくなる王朝を現実にあらしめるための行動をおこなっていたとされている。Rashahāt は次のように伝えている。

Īshan<sup>15)</sup> 御前が王達 (salāṭīn) の精神を支配していたことの行跡は十分明らかになっている。自己の力について語られた際、次のようにおっしゃられた。「もしも、私が単なる shaykh としてのみ行動していたならば、この世で (私以外の) 1 人の shaykh も弟子 (murīd) をみいだすことはなかったであろう。しかし、私には別の仕事が命ぜられている。ムスリム達 (muslimānān) を圧政者達 (zalama) の害から守ることである。このために、王達 (padshahān) と親しく交わり、彼らの精神を支配し、それらの行動を通して、私はムスリムのめざすところのことを達成せねばならない。」また、次のようにもおっしゃられた。「神 (Ḥaqq) —— 讃えあれ —— はまさしくその

15) Khwaja Aḥrār が Īshan なる尊称で呼ばれていたこと、及びその語義については *Ulugh-beg*, pp. 168~9 参照。また、19 世紀末にやはり中央アジアにおいてスーフイズムの導師が Īshan と呼ばれていたこと、及び彼らの活動については小松久男「タシュケントのイシャーンについて」『イスラム世界』23・24, 1985, pp. 69~90 がある。



関心のゆえに私にある力を与えたもうた。その力は、もしも私が欲しさえすれば、1通の手紙によって神の力 (uluhryat) に異議を申したてている中国 (Khaṭa) の王さえも、王国を捨てさせ、はだして棘とほこりの中を走らせ、中国から私の部屋の敷居にまで達せしめることができるのだ。しかし、この力は、我が主の命を待って、主が欲したまい、神命が下った時にのみ現れるものである (*Rashaḥāt*, II, p. 531)。

この言葉によって、Khwāja が自己のなすべきことを、単なる Naqshbandī 教団の shaykh としての活動だけではなく、ムスリムを支配者の圧政から守ることであると考えていたことがわかる。支配者と交わるのはそのためであった。また、彼はこの目的のために神から特別な力を授けられていたと公言していたのである。

注目しておかねばならないのは、上のような発言が、スーフィー教団の 1 shaykh によってなされていることである。正統イスラームの指導者 'ulamā' ではなく、スーフィズム運動の指導者によって全ムスリムの保護が宣言されるに到ったということは、15世紀中葉の中央アジアのイスラーム社会において、スーフィー達が社会的影響力において強い自信をもつに到ったことを示していると言えよう。

上の引用に述べられているように、Khwāja はしばしば支配者達に手紙をおくっていた。多数の手紙をおくっていたことが、次の引用から察せられる。

Īshan 御前が Mīrza Sulṭān Abū Sa'īd の招請に応じて Tashkand から Samarqand に移った時、世事に関する重要事を Mawlānā Khwāja 'Alī (Tashkandī) の裁量にゆだね、諸事のたづなを彼の有能な手にゆだねたのである。重要事を処理することにおける Mawlānā の能力は、1日に Īshan 御前のもとから時の王 (pādshāh-i zamān) や amīr 達や dīwān の役人達 (arbāb-i dīwān) に20通もの手紙を書いたが、1日として手紙の内容を Mawlānā が忘れてしまったり、その業務の遂行においていかげんであったりすることはなかったほどであった (*Rashaḥāt*, II, pp. 633~34)。

手紙の送り先から Khwāja が原則としてティムール朝の支配者達をどのような人々ととらえていたかがわかる。それは、軍隊を支える amīr 達、徴税及び行政にたずさわる dīwān の役人達、両者を統括する君主である<sup>16)</sup>。

16) ティムール朝の支配体制、特に行政機構 dīwān に関しては間野英二「ティムール朝の社会」『岩波講座 世界歴史』8, 1969, pp. 306~313参照。また、中央の行政機構は、王朝領域内の諸地域に散在した王子達の封領においても見出されることに注意しなければならない。(間野「ティムール朝の社会」pp. 312~13)。Abū Sa'īd が Harāt において中央君主となった後、やはり息子達を各地に分封したこと及びその時期については C. Азимджанова, К истории Ферганы второй половины XVв., Ташкент, 1957, стр. 16-22 に考察がある。

手紙の他、Khwāja は支配者達としばしば会見をした。Abū Sa'īd に向って言った Khwāja の言葉が伝えられている。

私は、Mīrzā Sulṭān Abū Sa'īd にこう言ったことがある。「あなたの関心が私と共にあり、私があなたに伺候することが許されていた時には、なんともすばらしいことに、私が何も言わないにもかかわらず、ムスリム達にとっての重要事が完全におこなわれていた (chi khūsh būdī ki muḥimmāt-i muslmānān bī gufti-yi mā saranjām shudī)。しかし、あなたが関心を払わず、何も言わなければ (ムスリム達にとっての重要事が) 完全におこなわれていないならば、私が、(そのことを) 上奏することによってあなたを苦しめることを許されたい (mā dar taṣḍr-i 'arḍ ma'dhūr-īm) (Majālis, 126a~b)。」

amīr 達を面責することもあった。

dah-yāzdah 税の誅求と課税 (muṭalabat wa taḥmīl-i dah-yāzdah) がおこった時、(Khwāja は) 幾人かの amīr 達に向ってこうおっしゃられた。「おまえ達は、努力もせずに心配もなく (bī sa'ī wa ihtimām) 大きな富を与えられている。今、貧しき人々やあわれな人々 (fuqarā wa masākīn) の財でもって、(自己の) 富をふやそうとするでない。さもなくば、おまえ達の運命がどこに到るか、私が見とどけてやろうぞ (Majālis, 105b~106a) <sup>17)</sup>。」

17) dah-yāzdah 税に関して、(4) *Manāqib* は I 章で述べた880年の事件に関連することと思われる次のような Sulṭān Aḥmad Mīrzā の言葉を伝えている。

かつて、金銭の不足から私は大きな困難を体験した。私は amīr 達と人民達に dah-yāzdah 税を課するかどうかを相談して、これを決定した。私は、もしも私が Īshān 御前に説明をせず、私の困窮を彼に知らせなかったならば、彼は (税を) 禁じようと思召されるであろうと考えていた。…… (ちょうどその時) 1人の召使いが入って来て、「Īshān 御前のもとから Mawlānā-zāda 御前がやってきて、あなたのために支出にあてるいくらかの tanga 銀貨をもってこられた。」と言ったのである。数えてみると1万の tanga 銀貨であることがわかった(Б. Казаков, там же, стр. 105, Чехович, там же, стр. 24)。

ティムール朝時代の tanga 銀貨の重量および比值は 1 tanga = 4.8g の銀 = 20銅 dīnār であるので (E. A. Давидвич, Денежная реформа Шайбани-хана (Из истории среднеазиатской экономики в XV в.), Материалы по истории Таджикиков и Узбеков Средней Азии, Сталинабад, 1954, стр. 94), 1万 tanga 銀貨は48 kg の銀, 20万銅 dīnār である。

また、Sulṭān Aḥmad Mīrzā が1494年に死んだ後、Sulṭān Maḥmūd Mīrzā が Samarqand の支配者になった時の事件として *Manāqib* は「この日、彼 (Sulṭān Maḥmūd Mīrzā) は、正統なる人々に高貴なる人々にも平民にも dah-yāzdah 税を課した。50万 dīnār が Īshān の召使い達や牧人達に割当てられたのであった (Б. Казаков, там же, стр. 106)。」と伝えている。同じ事件を伝える Babur によれば、この税はイスラーム法にかなっていないものであったらしく (Babur, 23b, 間野訳 (I), p. 222), 恐らく財産に応じた人頭税のことと思われる。根拠はわからないが、Чехович は dah-yāzdah の意味を10%とし、税としては10分の1税を意味すると規定している (Чехович, там же, стр. 405)。

同じく amīr 達に叱責の手紙を書いたことも記録されている。

次のようにおっしゃられた。「amīr 達が課税 (taḥmīl) しようとして、(1 度に税の) 全額 (mablagh-i kullī) を求めた。イスラーム法に反することは無効である。私はその場におらず、郊外 (ṣaḥrā') に出かけていたのであるが、ただちに手紙 (ḥaṭṭ) をしたためた。「おまえ達は、私が郊外に行った後にやってきた。」そして次の 2 つの言葉を書き送ったのである。1 つは「辛抱は喜びの鍵である (原文アラビア語)。」もう 1 つは、「後悔するし、よくないことがあるだろうからやめなさい。平安あれ。」と書いたのである (*Majālis*, 107a~108b)。」

では、誅求をおこなう君主や amīr 達<sup>18)</sup>に対する Khwāja の抵抗は彼らに対して何らかの意味をもちえたのであろうか。支配者側の Khwāja に対する態度を示す史料は少ない。

再び Abū Sa'īd の夢の解釈として次のような話が伝えられている。

Mīrzā Sulṭān Abū Sa'īd が次のように言った。「私は夢を見た。1 団の聖者達が私に向って『Khwāja 'Ubayd chūpān (牧夫の意, Khwāja Ahrār を意味する) は非常な力をもっており、彼に対抗したり逆ったりすることはできぬ。彼が向うところ欲するところ全てそのようになる』と言われた。」(Khwāja は)「正しいことを見られた。幼い時を思い出してみても、私に逆った人々はみな破滅しており、その人々の運命は

18) 上述の例の他、*Manāqib* は Abū Sa'īd の息子で Farghana の支配者 'Umar Shaykh Mīrzā と Khwāja の関係を伝えている。

次のように伝えられている (manqūl ast)。Mīrzā 'Umar Shaykh が Tashkand に居た時、(彼に) 良からぬ考えが浮び、ムスリム達に課税し、現金の割附 (ḥawāla-yi zar) をおこなった。Īshān 御前は Tashkand に行き、ムスリム達がそれから免ぜられるように、彼 ('Umar Shaykh) に 25 万 dīnār を与え、その結果、このムスリム達は 1 年の間、課税 (taḥmīlat) から免れしめられたのである (Б. Казаков, там же, стр. 104)。

別の時、ムスリム達の安寧 (rafāhiyyat) のために、Īshān 御前は ('Umar Shaykh に) 7 万 dīnār 支払った。しばらくして彼は再びムスリム達への課税を企てた。ある日、Īshān 御前は Mawlānā 'Abd al-Waḥḥab に向って言われた。「行って、'Umar Shaykh に言え。もしも彼がこの企てと魂胆を棄てるようならば、棄てさせよ。しかし、そうでなければ、私は彼を殺す。」と (Б. Казаков, там же, стр. 105)。

この話が事実とするならば、Казаков の述べるように、ティムール朝君主達は経済的にも Khwāja に依存していたということになろう (Б. Казаков, там же, стр. 105)。

その時点から前に進んではない。‘Abd al-Khāliq (Ghujduwānī) に従う人々に対抗する力が人間にあるわけがない。確かにあのお方は卓越者 (ghālib) であられた。」とおっしゃられた (*Majālis*, 88a~b)。

ここで Khwāja は, ‘Abd al-Khāliq Ghujduwānī を祖とする Naqshbandī 教団に伝えられる神秘的な力を強調している<sup>19)</sup>。一般に Abū Sa‘īd を含めて支配者達には, この神秘的な力に対する漠然とした恐れがあったようである。

Abū Sa‘īd のもとで有力な amīr であった mīr Mazīd Arghūn は, Abū Sa‘īd の死後 Hīṣār の Sulṭān Maḥmūd Mīrẓā のもとに行っていたが, ある時, Sulṭān Maḥmūd が Khwāja のいる Samarqand を攻めようとしたことがあった<sup>20)</sup>。この時, Khwāja は mīr Mazīd Arghūn に次のように書きおくれた。

対立と反抗から手をひけ。10万人がたった 1 人の ‘Abd al-Khāliq の織工 (bāfand) に対しても抵抗できぬことを十分にわきまえておらぬのか。もし抵抗したとしても打ち破られるのだ (*Majālis*, 88b, *Rashaḥāt*, II, p.528)。

同じ時に書かれた Sulṭān Maḥmūd Mīrẓā への手紙の一節には次のように書かれてい

19) ‘Abd al-Khāliq Ghujduwānī から Khwāja Aḥrār に到る Khwājagan 教団及び Naqshbandī 教団の系譜については, 間野英二「ナクシュバンディー教団に関する覚書(1)」『中東の社会変化とイスラムに関する総合的研究——報告と討論の記録』5, 国立民族学博物館, 1980, pp.161~64, p.167, H.Algar, “The Naqshbandī Order: A Preliminary Survey of its History and Significance”, *SI*, XLIV, 1976, pp.132~38, Trimmingham, *op. cit.*, pp.62~64, pp.92~94 参照。

20) この事件については *Rashaḥāt*, II, pp.526~530に Khwāja の Samarqand の支配者 Mīrẓā Sulṭān Aḥmad への強い影響力を示す事件として詳述されている。Азимджановаはこの部分を翻訳しているが, 彼女によれば, *Rashaḥāt*はこの部分の記述を Muḥammad Qaḍī (3)の書から引用しているとのことである(Азимджанова, там же, стр. 10—11)。また, Азимджановаはこの事件が何年に起ったことかわからないとするが, Чеховичは1470年のこととしている(Чехович, там же, стр. 22)。しかし, Чеховичが何によってそう断定したのかはわからない。

また, mīr Mazīd Arghūn は Abū Sa‘īd の支配時代に Samarqand の Khwāja を訪問し, 1晩にわたる「会話 (ṣuḥbat)」を Khwāja との間にもったことが伝えられる (*Rashaḥāt*, II, p.410)。ṣuḥbat が Naqshbandī 教団の修業法として大きな意味をもったことについては拙稿「ナクシュバンディー教団の修業法について」『東洋史研究』42—2, 1983, pp.102~106参照。

る<sup>21)</sup>。

神——讃えあれ——にはある僕達しもべがおり、彼らは神——讃えあれ——の完全なる恩寵をもつがゆえに、神は、彼らに対して危害を加えたり、戦いをしかけたりして彼らに被害や不幸をもたらすことを神御自身に対する危害や戦や粗暴さと考えられる (*Majālis*, 176b, *Rashahāt*, II, p. 527)。

ここに述べられている「ある僕達」とは、自分を含めた Naqshbandī 教団の聖者達であることは疑いない。

手紙によるこのようなおどしが意味があると少なくとも Khwāja が考えていたこと、Abū Sa'īd の夢の内容から考えて支配者達の Khwāja の神秘的な力に対する恐れを想定してよいだろう。しかし、この恐れはまさに精神的なものであった。したがって、Khwāja の影響力は支配者のメンタリティーに左右される。上述の手紙にもかかわらず、Sulṭān Maḥmūd Mīrza は Khwāja の住む Samarqand を包囲した (*Rashahāt*, II, p. 528)。なぜならば、兄の Samarqand の支配者 Mīrza Sulṭān Aḥmad が「ホージャ・ウバイドゥッラー 猊下に師事していた (*Bābur*, 18b, 間野訳( I ), p. 214)」に対して、弟の Mīrza Sulṭān Maḥmūd は「ホージャ・ウバイドゥッラー 猊下を軽んじていた (*Bābur*, 26a, 間野訳( I ), p. 225)」からである。

さらに、支配者に対する Khwāja の影響力を考える際には、君主の権力を制限する amīr 達の軍事力、また Khwāja 以外の聖職者、特に Samarqand の shaykh al-Islām<sup>22)</sup> の支配者への影響力も考えられなければならない。

Abū Sa'īd が 1458 年 Harāt に入り、Shahrukh 以降、初めて統一政権を立てたのもつかのま、1460 年夏、Sīstān の amīr Muẓaffar al-Dīn Khalīl が Harāt を包囲する。この反乱が鎮圧された直後、今度は Mā warā' al-Nahr で amīr Nūr Sa'īd の反乱がおこり、

21) 20) で述べたように *Rashahāt* はこの事件の記述を(3)の書によって書いているとのことであるが、*Majālis* は「Mīrza Sulṭān Maḥmūd が反抗の意図をもって Samarqand 近郊に到着した時、包囲と戦争が始まる 2・3 日前に Īshan 御前——神が彼の偉大なる霊を清めますように——は以下のような手紙をしたためられ送られたのであった (*Majālis*, 176 a)。」という書き出しで *Rashahāt* が伝えているのと同じ手紙を引用している。字句に異同がある場合には *Majālis* に従った。

22) ティムール朝における shaykh al-Islām については間野英二「ティムール朝の社会」p. 312 参照。

それはそのまま1461年の Muḥammad Jūkī b. 'Abd al-Laṭīf b. Ulugh Beg の Mā warā' al-Nahr での大反乱に続く<sup>23)</sup>。各地に拠る有力な amīr 達は造反常なく、当時のティムール朝君主の権力は Khwāja の理想とする神の力の顕現としての強力なる王権とはほど遠いものであった。

また、Samarqand の shaykh al-Islām に関しては、1451年に Abū Sa'īd が Samarqand をとった際、Harāt に逃れていた shaykh al-Islām, Burhān al-Dīn を Abū Sa'īd は1455年わざわざ Mīrzā Abū al-Qāsim Babur に頼んで Samarqand に呼び返している (AR<sup>24)</sup>, p. 1093)。Burhān al-Dīn と Khwāja Aḥrār ははなはだ仲が悪く、Abū Sa'īd の死のしらせが Samarqand にはいった時、shaykh al-Islām は、Khwāja Aḥrār の財産を略奪してもよいという教令 (fatwā) を出したと言われている (*Rashaḥāt*, II, pp. 544~549)。

こうした Khwāja とティムール朝支配者達のおかれた政治的環境を考慮するならば、Khwāja の支配者達に対する影響力は聖者伝が伝えるほどに強力なものではなかったことは明らかである。しかし、Naqshbandī 教団の 1 shaykh が、ムスリムの保護者として支配者達に接し、神秘的、精神的な力を背景としてムスリムの保護のために支配者に対して数々の抗議をおこなっていたということは、聖者伝のある程度誇張された表現をさしひいて考えたとしても事実として承認してもよいだろう。

次に、Abū Sa'īd の統治時代に限って、王朝側の年代記によって Khwāja Aḥrār の具体的な政治活動をみていこう。聖者伝の描く Khwāja の活動は年代記の側からどの程度検証できるであろうか。史料の性質上当然のことであるが、両者の記述の矛盾があらわれてくる。

### III Khwāja Aḥrār と Abū Sa'īd

#### 1) Abū Sa'īd の即位

853/1449年、25歳の Abū Sa'īd は、アム川をはさんで息子の Mīrzā 'Abd al-Laṭīf と

23) 1463年まで続く Muḥammad Jūkī の反乱については *Ulugh-beg*, pp. 171~72, Ажимджанова, там же, стр. 20~21 参照。

24) 以下に引用するティムール朝の年代記の略称は以下のごとし。

AR: 'Abd al-Razzaq Samarqandī, *Matla'-i Sa'dayn wa Majmū'-i Bahrayn*, ed. Shaft', M., II—2·3, Lahore, 1949.

Khwāndamīr: Khwāndamīr, *Ḥabīb al-Siyar*, IV, Tehran, 1333.

対峙していた *Mā warā' al-Nahr* の支配者 *Ulugh Beg* の軍営 (*urdū*) を離れ「*Arghūn* 族 (*īl-i Arghūn*) と呼ばれる一団の人々<sup>25)</sup>」を率いて、*Ulugh Beg* の息子 *Mīrzā 'Abd al-'Azīz* の守る *Samarqand* を包囲した。これが、*Abū Sa'īd* の政権獲得への第1歩であった。しかし、この試みは、急拠 *Samarqand* に引返した *Ulugh Beg* によって失敗に帰し、*Abū Sa'īd* は *Arghūn* 族のもとに逃れた<sup>26)</sup> (*AR*, pp. 987~89)。

この後、父 *Ulugh Beg* を殺害して *Samarqand* の王位についた *'Abd al-Laṭīf* は、*Abū Sa'īd* を *Arghūn* 族のもとから引き離し捕えることに成功したが、*Abū Sa'īd* は脱走し (*AR*, p. 994), *Samarqand* で *'Abd al-Laṭīf* が暗殺された同じ日、854年 *Rabī' al-Awwal* 月26日 (1450年5月9日) *Bukhāra* で蜂起するが再び失敗する (*AR*, pp. 1006~7)。そして、次には *Turkiṣtān* の *Yasī* の町をとり、*'Abd al-Laṭīf* 暗殺の後に *Samarqand* の王位についた *Mīrzā Sulṭān 'Abd Allah* のさし向けた軍を撃退した後、*'Abū al-Khayr Khān* 率いる *Uzbek* の軍隊の協力を得て *'Abd Allah* を打ち破り、*Samarqand* にて全 *Mā warā' al-Nahr* の王位についたのである (*AR*, pp. 1015~24)。*'Abd Allah* との最終的な戦いの日付けは史料によって異同があるが、*AR* によると 855年 *Jumādā al-Ūla* 月22日 (1451年6月22日) である。

以上の経過はバルトリドによって詳述されているが (*Ulugh-beg*, pp. 157~165), パ

25) *Arghūniyān* (*Khwandamīr*, p. 49), 「*Turkiṣtān* のトルコマン (*tarākima*) である *Arghūn* の人々 (*ahl-i Arghūn*)」(*Dawlatshah*, *Tadhkirat al-Shū'arā'*, ed. Muḥammad Ramḍānī, Tehran, 1338 s, p. 274) と表現される。バルトリドは *Dawlatshah* に従ってトルコマンの部族と考えているが (*Mīr 'Alī-Shīr*, p. 131), この *Arghūn* と呼ばれる人々がいかなる集団であったかは稿をあらためて論じたい。ここではただ、先にあげた *amīr Mazīd Arghūn*, 「*Sulṭān Abū Sa'īd Mīrzā* の王位獲得時に有力な権勢あるベグであった (*Babur*, 175 a, 間野訳(II), p. 112)」*amīr Ulūs Arghūn*, *amīr Sulṭān Arghūn* など *Arghūn* という集団名をもつ人々が *Abū Sa'īd* の *amīr* 達の多くを占めることを指摘しておく (*Mu'izz al-Ansāb fī Shajarat Salāṭīn Moghūl*, MS. Bibliothèque nationale, Ancien fonds persan 67, 151 b~152 a)。

26) バルトリドは *Abū Sa'īd* が逃げ込んだ「*Arghūn* 族の住地 (*manāzil-i īl-i Arghūn*)」(*Khwandamīr*, p. 49) を *Bukhāra* 近郊と考えているようだが (*Mīr 'Alī-Shīr*, p. 131), 根拠がわからない。後述するように *Abū Sa'īd* が再び蜂起したのが *Bukhāra* であったからかもしれないが、この蜂起の時には「多くの人々 (*Khalq-i bisyar*)」が彼のもとに結集したとあるのみである (*AR*, p. 1006)。

ルトリドの使った *AR*, *Khwandamīr*, *Tārīkh-i Abū al-Khayr Khānī*<sup>27)</sup> などの年代記には *Khwāja Aḥrār* の名はまったくあらわれてこない。ただ、バルトリドが指摘しているように (*Ulugh-beg*, p.167), 1454年の *Samarqand* の包囲に関する *AR* の記述の中に, *Abū Saʿīd* が王位につく以前に *Khwāja Aḥrār* に会い, *Khwāja* は「(*Abū Saʿīd* の) 高貴なる心に世界の王権への野望をすえられた。そして, *Sulṭān Abū Saʿīd* は常に自己をかの御前の命に従わしめ, その忠告 (*ishārat*) に逆うことは, たとえそれが可能であったとしても, 彼にはできなかつたのである (*AR*, p.1063)。」とあるのみである。これに対して聖者伝 *Rashahāt* は, *Khwāja* の弟子達の話として, *Abū Saʿīd* の名が知られる以前に *Khwāja* は彼の名を紙に書き, ターバンの中に入れ, 弟子にその名の人物について尋ねられた時, *Tashkand*, *Samarqand*, *Khurāsān* を支配するようになる人物と答えたという話 (*Rashahāt*, II, p.519) と, *Abū Saʿīd* は *Aḥmad Yasawī* ともう1人の見知らぬ人物を夢に見, その人物をさがして *Tashkand* におもむき, *Tashkand* 南方の *Farkat* において *Khwāja* と初めて会い, 神の精神的及び神秘的奇跡の援助により 'Abd Allah を打ち破り, *Samarqand* に入ったという話を伝えている (*Rashahāt*, II, pp.519~21)。

従来, この *Rashahāt* の *Khwāja* と *Abū Saʿīd* の会見の記事に対応するのは上述の *AR* の記述だけであり, その真偽は疑問視されていたのであるが<sup>28)</sup>, *Ахмедов* の翻訳する *Baḥr al-Asrār fī Manāqib al-Akhyār* には, *Abū Saʿīd* は *Паркент* で *Khwāja* に会い, 彼の助言により *Abū al-Khayr Khān* に援助を求めるに到ったことが書かれている<sup>29)</sup>。話ができすぎているきらいがあるが, 後世の史料ながら *Baḥr al-Asrār* は *Uzbek* 側の情報を伝える史料としてその記述を無視することはできない。ティムール朝側の史料において *Abū Saʿīd* が *Uzbek* の援助を得て政権についたことに関する記述は, ティムール朝側の立場を反映してか *Uzbek* 側の史料との間に大きなずれがあり<sup>30)</sup>, 聖者伝を含めて3つの立場の史料を全て整合的に解釈することは難しい。しかし, *Abū Saʿīd* が政権を取

27) この史料はいまだ校訂本が出されておらずロシア語訳を利用した (*Материалы по Истории Казахских Ханств XV-XVIII веков, Алма-Ата, 1969, стр. 161-167*)。

28) *Rogers* は *Rashahāt* の記述を後世につくられた話としている (*Rogers, EIr, p.668*)。

29) *Б. А. Ахмедов, Государство кочевых узбеков, Москва 1965, стр. 130, 164*. なお, *Baḥr al-Asrār* については *Материалы по Истории Казахских Ханств XV-XVIII веков, стр. 320-328* 参照。

30) 史料間の記述の違いについては *Ulugh-beg*, pp.165~168参照。



るとすぐに Tashkand から Khwaja を Samarqand に招聘していることから考えても、2人がそれまでに会っていたことは事実であり、その会見が Abū Sa'īd の政権奪取に重要な意味をもったと考えてよいと思われる。

さらに、Khwaja がすでに 1 度は Mīrzā 'Abd Allah の支配する Samarqand に行っていたことが Mawlānā Naṣīr al-Dīn Utrārī によって伝えられている。

Īshān 御前はある事件においてイスラーム法が Īshān の助力によって強力になるであろうことを見てとられ、また、このことは王達の支持 (i'ānat-i salaṭīn) なしには不可能であると考えられた。そして、このために時の王に会うために Samarqand にやってこられたのであった。この時、Samarqand の支配者 (wālī) は Mīrzā 'Abd Allah b. Mīrzā Ibrāhīm b. Mīrzā Shāhrukh であった。私 (Naṣīr al-Dīn) はこの旅において Īshān 御前のおそばに従っていた。Samarqand に着いた後、Mīrzā 'Abd Allah の amīr 達の 1 人が Īshān 御前のもとにやってきた。(Khwaja は) 彼に向かって「この地方にやってきた目的はあなたの Mīrzā にお会いすることである。もしもあなたがそれに尽力するならば、多くのよきことがありますよ。」と言った。amīr は無作法にも「我々の Mīrzā は思慮なき若者です。彼に会うことは無理です。単なるスーフイーにすぎぬ者 (darwīshān) が、かくなる要求でもっていったい何をしようと言うのか。」と言ったのである。Īshān 御前は怒り、「私には王達と交わることが (神から) 命ぜられたのであり、私自身の意図でもって来たのではない (mā bi-khūd nayāmada-īm)。あなたの Mīrzā が思慮しないならば、思慮ある別の人物がやって来るだろう。」とおっしゃられた。——中略——そして、その日のうちに Tashkand に帰ったのである (*Rashahāt*, II, pp. 518~19)。

この伝承は、伝承者の名が書かれており事実と考えられる<sup>31)</sup>。Khwaja は、1450年5月から1451年6月の間に Samarqand の支配者であった 'Abd Allah に会おうとしたが、1人の amīr に妨げられて会うことができなかったのである。この事件が Abū Sa'īd に接触する以前のことか以後のことかはわからないが、Khwaja は、Tashkand に居る時にすでにティムール朝君主に期するものがあり、実際に行動をおこしていたのである。

ではなぜ門前払いをくったのであろうか。それは、'Abd Allah は Samarqand の shaykh al-Islām, Burhān al-Dīn と関係が深かったからであると思われる。彼は

31) Mawlānā Naṣīr al-Dīn Utrārī については Tashkand 時代からの弟子として *Rashahāt*, II, pp. 641~43に述べられている。

「Mirzā Sulṭān ‘Abd Allahのおそばで、完全なる忠誠を現出させていた（AR, p.1023）」ので、Abū Sa‘īdが‘Abd Allahを打ち破った時にKhurāsānへ逃れている。正統イスラームの代表者であるshaykh al-Islamとの関係が、amīrをしてスーフィーに何ができるかと言わしめたものと思われる。

以上のごとく、Abū Sa‘īdのSamarqandにおける政権は、Arghūn族及び遊牧Uzbekの軍事力によって獲得されたものであったが、Abū Sa‘īdは即位する以前にKhwāja Aḥrārに会っており、彼の助言によりUzbekに援助を求めるに到ったという*Baḥr al-Asrār*の記述はにわかには信じられぬとはいえ、会見は重要な意味をもち、それが機縁となりKhwājaをTashkandからSamarqandに招聘することになったと考えられるのである。また、KhwājaはTashkandにいた時点においても、時のSamarqandの支配者‘Abd Allahに会うためにSamarqandに行っており、ティムール朝の政権になみなみならぬ関心を示していたことも注目されるのである。

## 2) 1454年のSamarqand包囲戦

1454年の春、Abū Sa‘īdはアム川を渡り、Balkhの町をとり、「BadakhshānからMurghab川」までの地域を新たにその支配下に置いた（AR, p.1053, Khwādamīr, p.52）。この軍事行動に対して、Khurāsānを支配するティムール朝のMīrzā ‘Abū al-Qāsim Baburは撤退したAbū Sa‘īdを追って（AR, p.1055）、Ramaḍān月1日（1454年8月25日）アム川を渡り、Shawwāl月14日（10月7日）Samarqand近郊に到着した（AR, p.1061, Khwādamīr, pp.54~55）。そして、町にたてこもったAbū Sa‘īdとの間に40日におよぶ包囲戦が展開されたのであるが、最終的には和平が締結され、アム川を境として両者の領域が定められた（AR, pp.1076~77, Khwādamīr, p.55）。Abū Sa‘īdはその年の春の遠征によって得たアム川以南の領土を全て失ったのである。

Samarqandを包囲された時点において、Abū Sa‘īdはアム川を渡り帰還する途中で軍隊を解散してしまっており（AR, p.1062）、窮地におちいった彼はTurkistān方面へ逃れようとした。この時、Khwājaが彼を引きとめ、町の防衛を決意させしめたことは年代記、聖者伝双方に書かれている有名な事実である（AR, pp.1063~64, *Rashahāt*, II, p.523<sup>32</sup>, Aubin, J., *Et*, I, ABŪ SA‘ĪD, p.147）。ARはまた、この時次のような注目すべき記述を残している。

（町の）貴顕達（akābir wa ashraf）は、職人達やギルドに属する人々とその親方達（muḥtarifa wa aṣnāf wa arbāb<sup>33</sup>）、町の区長達（Kalāntarān-i maḥallāt）、近郊の農民達（ra‘āyā’-i nawāḥī wa bulūkat）と共に口々にさげんで、Khwāja御前の前に助

けを求めた。(御前は)「たとえ半年いや1年、町を守らなければならないとしても、私は城塞防衛に従事し、命の最後の息が残っている限り町の守護に努力し、(町を)強奪者に渡しはしない。」と言い、Khwaja 御前は彼らを祝福し、彼らに町を要塞化するように、また心を創造主の寛大さにゆだねるようにと命じたのであった (AR, p. 1063)。

そして、人々は Khwaja が引きとめた Abū Sa'īd の軍隊と協力して町の防衛に従事したのである (AR, p. 1064)

ここにあげられた Samarqand 市民の実態はいまだ明らかにされてはいないが、Khwaja は Samarqand にやってきて3年の後に早くも貴顕達を含む Samarqand 住民の指導者として王朝側の年代記に現れてきているのである。

### 3) 税の免除

Abū Sa'īd が Khwaja Aḥrār の要請により、イスラーム法に反する商税である tamgha 税<sup>34)</sup>を廃止したということは、しばしば先学の指摘するところである (*Ulugh-beg*, p. 173, Aubin, J., *EI*<sup>2</sup>, I, p. 148)。

32) 「Abū Qasim Babur が向ってくることを知った時、(Abū Sa'īd は) 1人で (dar khalwatī) かの御前との高貴なる会合へと急ぎ (bi-ṣuḥbat-i sharf-i an Ḥadrat shitaft), この困難な事態の解決と、この恐しき出来事の回避を請い求めたのである (AR, p. 1063)。」  
「Mīrzā Sulṭān Abū Sa'īd は、Turkistan 方面へ行くつもりであったのであるが、Khwaja との相談、そしてその助言を適当とみなしたことによって (binabar-i yarāq (gh) wa maṣlaḥat dīd-i Khwaja), 決意をひるがえした (AR, p. 1064)。」

「Mīrzā Babur がアム川を渡ってきた時、Mīrzā Sulṭān Abū Sa'īd の amīr 達の1団は一致して、Mīrzā を Turkistan へ連れていき、そこを固めようと相談し、らくだに荷を乗せた。そのことは Īshan 御前の知るところとなり、彼はらくだ引き達に強いて、荷をおろすように命じ、Mīrzā の前に行き次のように言われた。「どこへいかれるのか。逃る必要はない。事態は全て、この地で満足いくようになりましょう。——後略——。」 (*Rashaḥāt*, II, p. 523)。

同様な事実を伝えながらも年代記と聖者伝の記述に大きな違いがある。

33) 当時の中央アジアにおいてギルドが存在したことについては、P. Г. Мукминова, *Очерки по истории ремесла в Самарканде и Бухаре в XVI веке*, Ташкент, 1976, стр. 172-174 参照。

34) モンゴル人によってイスラーム圏にもちこまれた tamgha 税については本田實信「タムガ (ТАМГА) 税に就いて」『和田博士古稀記念東洋史論叢』1960, pp. 833~847 参照。

1457年, Mīrzā ‘Abū al-Qāsim Babur が没した後, 1458年 Abū Sa‘īd は Harāt に入り, Khurāsān をもその支配下に組み入れた。しかし, Khwāja は Samarqand に残っていた。865年 (1460年) 冬, Mā warā’ al-Nahr において amīr Nūr Sa‘īd が Samarqand と Bukhārā の近郊を侵したという知らせが Abū Sa‘īd のもとに入った。Abū Sa‘īd の使者が Nūr Sa‘īd のもとに赴き服従するようとの言葉を伝えたが聞きいれず, 使者はその足で Samarqand に行った。使者の要請により Khwāja Aḥrār が Nūr Sa‘īd の居た Bukhārā の Kūh-i Nūr に赴き説得にあたったが, この説得も効を奏せず, 「Mā warā’ al-Nahr の amīr 達の1団」が Kūh-i Nūr にせまると, Nūr Sa‘īd は荒野 (biyābān) へと逃れた (AR, pp. 1230~31)<sup>35)</sup>。Khwāja は Bukhārā から Samarqand へは帰らず, そのまま Khurāsān へ向い, 865年 Ṣafar 月23日 (1460年12月8日) Harāt に到着した (AR, p. 1232)。Abū Sa‘īd は彼に何度も会い, 彼の助言を受け入れ, 「結局 (az ān jumla), 総額が莫大であった Samarqand と Bukhārā の tamghā 税を完全に廃止し, この件に関して世界が従うべき法令を完全なるものとした。そして, 王権それ自体である御前 (Abū Sa‘īd) は, 神に守られたる全ての諸王国において (dar tamām-i mamālik-i mahrūsa), tamghā 税と全てのイスラーム法で禁止されていること (tamghā wa jam‘ manāḥī) を廃止することを約束したのであった (AR, p. 1233)」。Khwāja は Rabī‘ al-Awwal 月11日 (1460年12月25日) に Mā warā’ al-Nahr へと帰っていった (AR, p. 1234)。

以上が年代記から知られる tamghā 税の廃止のいきさつである<sup>36)</sup>。ところが, おどろ

35) この後, Nūr Sa‘īd は翌年に勃発した Muḥammad Jukī の反乱に加わり, その後は短期間であるが Khwarazm を支配した (*Mīr ‘Alī-Shīr*, pp. 24~25)。また, 彼は Abū Sa‘īd が政権を取るにあたって彼のもとに従っていた amīr 達の1人であり (AR, p. 1211), 1454年の Samarqand 包囲においても amīr Urūs Arghūn 等と共に Mā warā’ al-Nahr の amīr 達の1人として Abū Sa‘īd のもとで戦っている (AR, p. 1075)。Mu‘izz al-Ansāb, f. 151 b は彼を Abū Sa‘īd の amīr として6番目にランクしている。

36) Aubin は「Samarqand, Bukhārā と Harāt において tamghā が廃止されたか又は減額された (J. Aubin, *EP*, I, p. 148)」と述べているが上の文章だけからすれば不正確であろう。全国土での廃止が約束されたとあるのみである。Samarqand の tamghā 税が Abū Sa‘īd の死後も徴収されていなかったことは *Rashahāt* II, p. 539 によって確認されるが, Babur は911年 (1505年6月4日~1506年5月23日) の時点において Kabul の町で tamghā が徴収されていたことを伝えている (*Babur*, 159 a, 間野訳(II), p. 86)。

いたことに、同じく tamgha 税の廃止に関して *Majālis* は一方の当事者 Khwāja Ahrār 自身の証言を記録している。

私は Mirzā Sultān Abū Saʿīd の前で「某の tamgha 税を免除してください (tamghā-yi furānkas rā maʿf dārīd)。」と言った。彼は受け入れて「徴収しない。」と答えた。その後私は「私はあなたと長い付き合いがあります (muddat-hā-st ki bi-ḥadrat-i shumā musāḥabat dārim)。私にはこの決定よりももっと好ましい決定があるように思われます。tamgha 税はイスラーム法に反しており (tamghā nā mashrūʿ ast), 全ての人々から取ってはならないものであります。どうして1人の人物を特別にすることができましょう。私はその決定を恥づかしく思います。」と言った。この言葉の後、Mirzā は沈黙し、一言もしゃべらなくなった。私もまた沈黙した。私は家 (khāna) に帰り、この会談の模様を mīr Nūr Saʿīd に話した。彼 (Nūr Saʿīd) は Mirzā の前に行き、「全ての tamgha 税を廃止しないとは、あなたはおかしいことをしておられる (shumā ʿajab kardā-īd ki az tamāmat-i tamghā nagudhashta-īd)。」と言ったのである。Mirzā は「言葉がああ決定から過ぎ去った時に、私は Īshān の前でその決定を主張したことに恥づかしさをおぼえた。神がお望みとあらば、私は全ての tamgha 税を、Īshān の高貴なる恩恵の功德でもって (barakat-i iltifāt-i sharf-i Īshān) 廃止しよう。」と答えたのであった。そして、しばらくの後、その全てを廃止したのである (*Majālis*, 91b~92a)。

さて、この話は、Abū Saʿīd はすんなりとは Khwāja の要求を受け入れず、mīr Nūr Saʿīd に詰問されてはじめて全 tamgha 税の廃止を約束したというなまなましい交渉の模様を伝えているのであるが、上述の AR の伝える tamgha 税廃止のいきさつとは大きく矛盾している。この話の mīr Nūr Saʿīd は AR の amīr Nūr Saʿīd と同一人物であろうことは疑いない。AR の記述からすれば、Nūr Saʿīd はすでに反乱をおこしているのだから、Abū Saʿīd に会いにくるような状況は考えられない。コピストの誤記又は Khwāja の記憶違いであろうか。しかし、かくのごとき重要な交渉の一方の当事者の証言がある以上、AR の記述が絶対に正しいものとは言えないであろう。現在の段階でこの2つの史料を整合的に解釈することは困難であるが、少なくとも1460年以前 amīr Nūr Saʿīd が Abū Saʿīd のもとに来ることができた時代、すなわち Abū Saʿīd が Samarqand に居た時点においてすでに tamgha 税の廃止が Khwāja によって献策されていた可能性があると思われる<sup>37)</sup>。

また、Khwāja の言葉から察せられるように tamgha 税の廃止は Abū Saʿīd にとって

なかなか受け入れ難いことであったこと、これに対して Khwāja も amīr の口をかりてもう 1 度要求を出さねばならなかったことは、amīr をまきこんだかたちでの両者の関係を如実に示していると言えよう。そして、最も重要なことは、その年代に問題を残したものの、tamgha 税の廃止が Khwāja の Abū Saʿīd に対する強い働きかけによっておこなわれたということが、初めて Khwāja 側の立場に立って書かれた史料によって確認されたということである。

さて、AR は Khwāja が Mā warā' al-Nahr に帰った同じ月 (Rabī' al-Awwal 月) の終りに Abū Saʿīd が次のような命令を下したことを伝えている。

収穫の前に農民に何物も割附けてはならない (ḥawāla nadārand)。もしも、やむをえずそれ (割附) があつたとしても、もとの税額の  $\frac{1}{3}$  以上 (jiyadat az dū dāng-i aṣl-i mā) 取つてはならない<sup>38)</sup>。正税 (māl) は 3 期に分けて徴収され、1 度目は (jalālī 暦の) かに座月 (saraṭān) に、2 度目はおとめ座月とてんびん座月 (sunbula wa mīzān) に、最後は射手座月 (qaws) に現金で (bi-wajh) でおさめる<sup>39)</sup>。臨時税 (ikhrajāt) は、その説明 (mashrūḥ) が奏上され、その件に関して帝王の命令が定められないかぎり課税してはならない<sup>40)</sup> (kharj nayandāzand)。これに背くことあれ

37) 上述の Abū Saʿīd の命令の前半部分をすでに決定されていたことの最終的履行とみなせばこの解釈は可能である。すなわち、Khwāja は Abū Saʿīd が Samarqand 時代に決定していたことの履行をせまり、あわせて全国内での tamgha 税廃止の約束をとりつけたことになる。

38) 割附 (ḥawāla) の制度については本田實信「ガザン=カンの税制改革」『北海道大学文学部紀要』10, 1961, p. 97 参照。同論文では aṣl-i mā は「基本税額」と訳されている。また Aubin はこの Abū Saʿīd の命令を「いかなる場合においても収穫以前に Kharāj の  $\frac{1}{3}$  以上を割当ててはならない (J. Aubin, *EI*<sup>2</sup>, I, p. 148)。」と解釈しているが、māl をただちに kharāj と考えられるかどうか疑問である。

39) 春分を元旦とする太陽暦 jalālī については *EI*<sup>2</sup>, II, DJALĀLĪ (Ta'rīkh-i Djalālī), pp. 397 ~ 400 参照。現在のアフガニスタンではやはり星座の名が月名として使われている。

40) ikhrajāt は本来「費用」「支出」をあらわすアラビア語であり、税目として使用された場合は臨時経費、臨時支出に使用する目的で徴収される臨時税である〔本田實信「ガザン=カンの税制改革」p. 108, Ann K.S. Lambton, *Landlord and Peasant in Persia*, Oxford, 1953; reprint, 1969, p. 429 (岡崎正孝訳『ペルシアの地主と農民』岩波書店, 1976, 「索引、用語の解説、文献目録および王朝表」p. 69)〕。理論的に言えばありとあらゆる臨時経費及び支出の名目に対して ikhrajāt は要求されるわけで、放置すれば恣意的な誅求となる。それゆえに王に対して説明が提出され許可を求めることが命令されているのである。

ば, *drwan* の者達は殺害されるべき者たちたるべし (*drwāniyān mustahiqq-i qatl bāshand*) (*AR*, pp.1234~35)。

Khawāja が去った直後に出された命令であることから, Aubin はこの命令も *tamgha* 税廃止と同じく Khawāja の要請によるものと解しているが (Aubin, J., *EI*<sup>2</sup>, I, p.148), 直接それを示す記述はない。ところが *Majālis* には臨時税 (*ikhrajāt*) の免除を Khawāja が Abū Sa'īd に要求したことが Khawāja 自身によって語られている。

私は *Mīrzā Sulṭān Abū Sa'īd* にある貧者 (*faqīrīn*) を臨時税 (*ikhrajāt*) から免除してくれるように要求した。彼は答えて「私にとって臨時税を免ずるよりも正税 (*mal*) と *H. R. B*<sup>41)</sup> を免ずることの方がたやすい。」と言った。私は「なぜか。」とたずねた。彼は「臨時税を免ずることは他の農民に対して圧政 (*ẓulm*) をおこなうことになるからだ。すなわち, 彼の負担と苦役 (*bār wa miḥnat*) が (他の) 人々の上にかかってくることになるからだ。」と答えた。私は「この負担は神と預言者の許すところのものではない (*in bār nafarmūda-yi Khudā wa rasūl ast*)。あなたが作り出した負担 (*bār*) でもって, イスラーム法に反して, 人々に課税をしてはなりません (*bā bar-st ki shumā paidā sakhta-īd bi-khilāf-i shrī'at taḥmīl makunīd*<sup>42)</sup>)。また, だれに対しても圧政をおこなってはならないのです (*bi-nisbat-i hichkas ẓulm waqī' nashawad*) (*Majālis*, 157b)。

残念ながら Khawāja の言葉に対して Abū Sa'īd がどうしたかは記されていないが, 上述の *tamgha* 税廃止についての会話を想起すれば, 両例が非常によく似ていることがわかる。ある1人の人物の臨時税の免除を願いでて, 重ねてイスラーム法に反するという理由から税全体を考え直すようにせまっているのである。ここで *AR* に記されている Abū Sa'īd の命令をもう1度見直してみよう。それは, 収穫以前の割付を原則として禁じ, 正税の徴収時期を定めることによって臨時税 (*ikhrajāt*) を君主の許可なく取るこ

41) この単語をそのまま *ḥarb* (戦争) と読んだのでは意味をなさない。おそらく *Kharj* の誤記であり, *mal wa kharj* の両語で正税を意味すると思われるが, *Majālis* の他の写本が見られない現在の段階では推測の域を出ない。

42) この場合, 負担とは *ikhrajāt* を徴収する場合の税目であろう。負担の免除の代償として臨時税を徴収するわけである。Khawāja はその負担自身がイスラームに反するものと言っているわけである。

とを禁じている。無規律に徴収される税、特に臨時税に強い規制を与えているのである。そして、*Majālis* の伝える Khwāja の言葉を読むならば、Aubin の推測が正しかったこと、すなわち、Khwāja の要求によって Abū Sa'īd は上の命令を下したことが承認されるであろう<sup>43)</sup>。

tamghā 税は、モンゴル人によって東方イスラーム圏に持ちこまれて以来、イスラーム法に反する税としてはなほだ不評であったにもかかわらず続けられ、イランにおいてはサファビー朝の Ṭahmāsp がやっと927年 Sha'ban 月(1565年3月)に「3万 tūman 近く」もあつた tamghā 税廃止の勅令を出した<sup>44)</sup>。また、Mughal 朝においては Babur が領内の全イスラーム教徒に対して tamghā 税免除の勅令を933年 Jumādā al-Ūlā 月24日(1527年2月26日)に出したが、実際に廃止されたのは Jahāngīr の時代であつたといわれている(*Babur*, 312a, 314a, Beveridge 訳, p. 553, pp. 555~56)。Abū Sa'īd の tamghā 税廃止の命令は時期としてかなり早いものであつたと考えられる。tamghā 税の廃止及びおそらく無作為な額外誅求であつたと思われる ikhrajāt の規制の命令も Khwāja の要請で出されたものとすれば、Khwāja の Abū Sa'īd への影響力の強さを示しており、ティムール朝の支配に対して Khwāja の果たした役割はきわめて大きかつたと言わざるをえないであろう。また、本稿で紹介した *Majālis* という写本は、聖者伝の側から Khwāja と Abū Sa'īd の関係を具体的に検証するきわめて重要な史料であるということが明らかになつたと思われる。

#### おわりに

1467~68年の冬、Abū Sa'īd は冬営地 Marv において Qara-qoyunlu の Jahān Shāh が Aq-qoyunlu の Uzun Ḥasan によって殺されたという知らせを受けた(*AR*, pp. 1316~17)。この機会に、Shāhrukh 以来失われていた西方イラン領の回復を夢みた Abū Sa'īd は再び Samarqand から Khwāja Aḥrār を Marv に呼び、ある時は Khwāja が Abū Sa'īd を、別の日は Abū Sa'īd が Khwāja をおとずれ、「たびたび相談をかさねた後 (ba'ad az mashwarat-i bisyār)」Uzun Ḥasan に対する西方遠征を決意するに到つたのである(*AR*, p. 1321)。しかし、遠征はティムール朝側のみじめな敗北に終り、Uzun Ḥasan

43) tamghā税の場合と同じく、実際に交渉がおこなわれた時期については問題が残る。

44) Qaḍī Aḥmad Qumī, *Khulasat al-Tawārikh*, ed. I. Īshraqī, Tehran, 1980, pp. 449~50, Ḥasan-i Rūmlu, *Akhsan al-Tawārikh*, ed. 'Abd al-Ḥusayn Nawā'ī, Tehran, 1357, p. 550.



に捕えられた Abū Sa'īd は873年 Rajab 月22日（1469年2月5日）に殺された（AR, p. 1353）。この後、ティムール朝は Abū Sa'īd の息子達の支配する Ma warā' al-Nahr と Mīrza Sulṭān Ḥusayn の支配する Khurāsān にわかれ、2度と統一政権が立てられることはなかった。しかし、Khwāja は Samarqand において Abū Sa'īd の長男 Sulṭān Aḥmad に対して大きな影響力を保ちつづけ<sup>45)</sup>、Khwāja の死後もその息子達が Ma warā' al-Nahr の政治に大きな役割を果たしていたことが明らかにされている<sup>46)</sup>。

以上、Khwāja Aḥrār という Naqshbandī 教団の shaykh はみずからイスラーム法の守護者と公言し、ティムール朝君主及びその配下の amīr 達と接触し、その任を果たそうとしていたこと。彼の影響力は、おそらく彼がもつと信じられていた神秘的な力に対する恐れというものにもとづくものであったであろうこと。Khwāja は Abū Sa'īd が王位に即く以前に何らかの形で Abū Sa'īd に接触し、それによって政治的舞台に登場してきたこと。Khwāja が Samarqand にきて3年にして、もうすでに Samarqand 市民の指導者として活動していたこと。年代に問題が残るものの Khwāja の要請により Abū Sa'īd は商税 tamgha を廃止したことが確認されること、また不当な臨時税 ikhrajat を厳しく規制する法令も Khwāja の Abū Sa'īd への働きかけによって出されていたことを述べてきた。また、その過程において、*Majālis* という今まで使用されていなかった聖者伝を利用することによって、Khwāja と Abū Sa'īd の関係を従来よりもより明確な形で描き得たと思う。ただ、I で述べたように、Khwāja の7種の聖者伝の内、本稿で使用したのはその内の2種に過ぎない。今後、新しい事実が発見される可能性は多いと思われる。また、大土地所有者としての Khwāja の実態は Чехович の出版した文書を詳細に研究せねばならず、その過程においてティムール朝支配との関係も必ずクローズアップされるであろう。どちらかという聖者側の立場に立って本稿で述べてきた Khwāja Aḥrār 像がくつがえされる可能性は十分ある。しかし、Aubin が先駆的業績「バムの2人のサイード」で述べているように、王朝の立場からのみ書かれた年代記の断片的記述にのみ頼って、正統イスラーム、神秘主義スーフイズム、シーア派メシア思想、土俗信仰などの交錯した世界観をもつ人々の中世イスラーム社会を究明していくことは不可能であり、支配や政治の局面においても同様であると思われる。あえて、あまりに聖者伝

45) Abū Sa'īd の死の責任を問われ一時危機に陥ったようである。上述の shaykh al-Islam による fatwā が出されたのはこのためであろう。

46) 堀川徹「ティムール朝末期の内訌をめぐって」『東洋史研究』35—4, 1977, pp. 1—48.

の立場に接近しすぎているという批判を予想しつつも筆をとった次第である。

また、はじめに述べたように15世紀はスーフィー教団がイスラーム圏各地に急速に拡っていく時代であった。その過程において聖者崇拜が拡大の重要な要因となっていたとされるが、本稿で描いたような Khwāja 像が民衆に信じられていたとするならばなぜこの時代に急に聖者崇拜がさかんになっていったかという原因の1つが明らかになるだろう。すなわち、民衆はスーフィー教団の shaykh にトルコ系遊牧民出身の軍事支配者層からイスラーム社会——ここでいうイスラームの実態はいかなるものであれ——を守る神秘的力と具体的な抗議活動を期待したのである。また、恒常的な軍事支配者層の圧迫によってイスラーム社会の中に生れる緊張と不安を解消させ得る越人的人格を shaykh 達に期待したのである。そして、少なくとも Khwāja Ahrār, 「バムの2人のサイド」はその期待に答えようと努力し、ある程度成功したのである。神秘主義を奉ずるとはいえ、あくまでも現実から逃避せぬ聖者達への期待は、ただちに崇拜へと変ったであろう。また、軍事支配者層と民衆との拮抗の上に安定した力を保持した聖者達が原則として永続的なワクフを持ち得たとすれば、自己の財産を守るために聖者への土地寄進が大規模におこなわれていったのも当然のことであったと思われるのである。しかし、土俗信仰と結びついた聖者崇拜と shaykh 達の大地主化は、スーフィー教団が急速に墮落していく原因でもあったのである。

#### 付記

井谷綱造氏、京都大学留学生マフムード・ナラーキー氏の御教示により訳文を改めた部分があった。羽田正氏、安藤志朗氏にはいくつかの部分の史料中の所在を指摘していただいた。また、*Majālis* のマイクロフィルムは、岡崎正孝氏、水田正史氏の御好意によって入手することができた。ここに記して謝意を表することとする。

(1985年5月記)